

J. C. オーツの *The Wheel of Love* の “Four Summers” における思春期の終焉

The end of adolescence in “Four Summers” in Oates’s *The Wheel of Love*

長 岡 成 幸

Shigeyuki Nagaoka

Abstract: This interpretative study of J. C. Oates’s “Four Summers” concludes my analysis of all twenty stories in *The Wheel of Love*. This is the seventh and last study. All the stories were discussed in my previous studies appeared in this bulletin. Oates depicts another story about a young girl, her coming of age and the difficulties when she determines the choice of her partner. The life of Sissie, the main character, is view from the eyes of the author. As in previous parts, we see a character who is vacillating between hope and fear.

Keywords: Joyce Carol Oates, American 20th Century Novel, Woman writer, Short novel

1. はじめに

ジョイス・キャロル・オーツの短編集 *The Wheel of Love* (1970) に収められた短編 “Four Summers”¹⁾ の作品解釈を通して、この作品におけるオーツのテーマと技法を考察する。収録された 24 編の作品全体を概観する中で、この作品は短編集の中でどのような位置を占めているのだろうか。また、オーツが語ったという「個々の作品はある意図の下で構成されている」とはどのようなものなのか。短編集の全体像を見るには、一度個々の作品を離れてみる必要があるが、その意図の一端はこの作品、つまりストーリーを解釈し、そのテーマと技法を探る中で理解されるだろう。この物語では、もう一つの思春期における少女の或る愛の形式が表現される。

2. “Four Summers” の構成および状況設定

この作品の構成と状況設定は密接に絡んでいて、1 から 4 までの 4 部構成、23 ページから成っている。そして、タイトルが示すように、同じ場所での 4 回の夏の場面を、それぞれ時を変え、4 回に分けて描写している。状況設定が同じ場所の 4 回の夏となれば、当然のことながら、その時間的、年代的な変化がテーマとなるだろうし、またそこに主人公が入ってくれば、その人物の成長と経過年度の変化もテーマとなる。事実、主人公の視点で語られるその夏を通しての幼年期と子供時代が 1 部と 2 部であり、思春期から結婚という大きな変化を見せるのが 3 部と 4 部である。

「それはちょっとした特別な日だった。」で始まるこの作品は、僅かな変化を見せるにしても、この夏の日という状況設定は一祝祭日、夏、湖畔のパブと水辺のテラス、親達の親族や大勢の仲間達、一日がかりのお酒と飲食とおしゃべり、喧騒一と変わらない。主人公の家族が以前住んでいた近所に遊びに出向き、そこに旧知の人達、家族が集ま

るという設定である。無論、10 歳少し前の年齢からか二十歳位の年齢の幅による時代、場所の盛衰はあるとしても、場所は同じである。冒頭部分に、全体や他に何ら話の筋の概略を示すような描写もないので、この幼児期の主人公の記憶に残っている或る夏の日から物語が始まるという設定である。

この作品を読み終えて、主題を考えてみると、後半の第 3 部の少女が思春期を迎え、異性にたいする感情の芽生えがテーマであり、4 部でその思春期の思い出が裏切られ、苦悩しつつ大人の仲間入りをする主人公がテーマである。それにしても、導入部とみられる 1 部と 2 部が長いと感じられるが、そのまだ自我の芽生えない主人公が思春期を迎え、男と出会い、次第に女心を動かし始める 3 部、4 部への展開を考察しつつ、思春期の異性に対する感情とその後の結婚をテーマに作品を見てみる。

3. 第 1 部と 2 部について

第 1 部は、年齢が明かされない主人公のシシー(Sissie)がかわいい盛りの女の子で、パパとママとその知人達がいる中をあちこち動き回っている様子が詳しく描写される。兄達のフランク、ジェリーはパブを出て、もっと広い範囲を動き回り、何とかボートに乗りたくて両親にせがむ。シシーの視点から、大人たちの世界と男の兄弟達の喧騒の世界が描写される。

第 1 部の出だしは、次のように母も若く、シシーも可愛い盛りである子供の場面から始まる。

It is some kind of special day. “Where’s Sissie?” Ma says. Her face gets sharp, she is frightened. When I run around her chair she laughs and hugs me. She is pretty when she laughs. Her hair is long and pretty. (209)

1) 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科

その日は祝祭日のようであり、パレードがあったり、兵士が歩いていた、お祭り気分の陽気な日である。テーブルはビール、食べ物の容器でいっぱいであり、シシーは“I can feel how happy they are altogether, drawn together by the round table.” (211) と感じる。大人たちはひたすら酒、トランプ、おしゃべり、ゴシップに昂じる。一方、子供たちは主人公達の兄弟しか登場せず、彼らは大人達の周りを遊びまわり、皆がやっているようにボートに乗って、湖に出て行きたいと思っている。しかし、ママはパパに頼もうとし、そのパパは面倒臭がって子供達の希望に応えてくれない。大人の世界と子供達の世界がかみ合わず、離れたままの状況であり、その中で主人公のシシーは兄弟からも離れ、大人の世界に、つまりママに付き添いながら、両方の世界の間接地帯に存在する。

“Can we go out in a boat, Dad?” says Jerry.

He and Frank keep running back and forth. I don’t want to go with them, I want to stay by Ma. She smells nice. Frank’s face is dirty with sweat. “Dad,” he says whining, “can’t we go out in a boat? Them kids are going out.” (210)

主人公は幼いながら、子供の目から大人の世界と子供の世界の両方を描写している。

第2部は、

We are at the boathouse tavern again. It is a mild day, a Sunday afternoon. Dad is talking with some men; Jerry and I are waiting by the boats. Mommy is at home with the new baby. Frank has gone off with some friends of his, to a stock-car race. There are some people here, sitting out at the tables, but they don’t notice us. (217)

という出でしで始まる。時期と場所は同じであるが、時間の経過でやや状況が変わっているのが分かる。このあとすぐに、Jerry is twelve now. とあるように、数年経過しているようだ。フランクは友達と出かける年ごろであり、ママには新しい赤ちゃんが生まれ、その子の世話で家にいる。家族の中心人物は、シシー、フランクとパパである。この第2部の内容は、湖にボートで出ることになっているが、パパがあちこちで友人達と話し込み、なかなか来ないこと、ボートで島に上陸して、シシーとジェリーは喜んで走り回ること、そうして戻ってくるとパパが浜辺で体調が悪く、吐いているというシーンである。パパはボートに乗る時から、オールで漕いでいる時でさえもビールを離さなかった。そして、He is always in a hurry to get things done.(219) とあるように、いつもの性格の如く、他のボートに負けないうように全力で早く漕いでいた。パパは顔が真っ赤になるほど、息が切れるほど力いっぱい漕いでいた。教会帰りの日だったのに、ビールがいけなかったのかもしれない。こ

の場面で、第二部は終わる。

しかし、そのような描写の中に一部象徴的な暗示めいた部分がある。パパが居酒屋を出て、男の仲間達と戯れの言葉を交わしながらボートまでやって来る場面である。次の引用の場面が、第3、4部への導線となると思われる。

Two women cross over from the parking lot. They are wearing high-heeled shoes and hats and bright dresses—orange and yellow—and when they walk past the men look at them. They go into the tavern. The men laugh about something. The way they laugh makes my eyes focus on something away from them—a bird flying in the sky—and it is hard for me to look anywhere else. I feel as if I’m falling asleep. (218-9)

最後に自分は眠気を催してきたとあるが、この場面は男の大人達が女達に対して自分とは異質なものの、未知な何かを感じているが、しかしそれは神秘的なものでもあり、いつか自分にも関係がある今は未知なものを想起させている。彼女としては、拒絶反応を示し、異質として排除すべきものではないものと判断している場面であると解釈できる。女性は男たちに何かを感じさせ、また彼らが女性達に何かを求めているようだと感じさせている。敢えて、論評すれば、いつか自分もそのような存在になるだろうか、という想いを主人公に感じさせている場面と解釈できる。女の子が思春期に入りつつある場面である。シシーからの直接の言葉はないが、男女関係において、淡い期待をシシーに抱かせている場面であり、これから自分にも関係してくる新しいもの、はるか遠くからやってくるものに期待を抱かせている情景であり、思春期の前哨線である。

4. 第3部—思春期の芽生えと少女の心理

第3部の出だしもこれまでと同様、兄弟達の動向を話した後で、酒場の場面で始まる。叔父や叔母達もいて相変わらず騒々しい場所である。

So here we are inside the tavern. There’s too much smoke, I hate smoke. Dad is smoking a cigar. I won’t drink any more root beer, it’s flat, and I’m sick of potato chips. Inside me there is something that wants to run away, that hates them. How loud they are, my parents! (221)

この場面から彼女もビールを口にしていることが分かる。第3部は、お店の中は飽きてきたので、彼女は車の中で待っていたいと母に話し、酒場を出るとある男が声を掛け来て、いろいろとやり取りをする場面で終わる。

外に出る前の、居酒屋の中を通る場面で、彼女はその中にいる人々の目を意識している状況がある。これは純粹さの表れで、大人の世界とは無縁であるが、またそれと同時

に、逆説的に強くその世界を意識させるものでもある。

When I cross through the crowded tavern I'm conscious of people looking at me. My hair lost its curl because it was so humid today, my legs are too thin, my figure is flat and not nice like Marian's—I want to hide somewhere, hide my face from them. I hate noisy place and these people. Even the music is ugly because it belongs to them. Then, when I'm outside, the music gets faint right away and it doesn't sound so bad. It's cooler out here. No one is around. (224)

この場面は、騒々しい居酒屋、大人の世界の居酒屋に対して、夕暮れで静寂の外界、純粋で孤独さを漂わせる自分である。息苦しい大人の世界から抜け出し、一息つく主人公である。

しかし、彼女がドアから出るとすぐ脇に男がいて声を掛けてくる。慣れた様子で、親しげに声を掛けてくる。盛んに「年は幾つ?」「誰と来ているの?」と訊いてくる。自分には関係ないと思いつつも胸が高鳴る。結果として、父達大人から離れるとは、いつもの領域を出て、冒険、アバンチュールに出かけるということになる。一人立ちするというシシーという象徴的な場面となる。

It's a game. I'm not afraid. When I think of my mother and father inside, something makes me want to step closer to this man—why should I be afraid? I could be wild like some of the other girls. Nothing surprises me.

We keep on talking. At first I can tell he wants me to come inside the tavern with him, but then he forgets about it; he keeps talking. ... My cheeks start to burn. I could be wild like Betty is sometimes—like some of the other girls. Why not? Once before I talked with a man like this, on the bus. We were both sitting in the back. I wasn't afraid. This man and I keep talking and we talk about nothing, he wants to know how old I am, but it makes my heart pound so hard that I want to touch my chest to calm it. We were walking along the old boardwalk and I say: "Somebody took me out rowing once here."

"Is that so?" he says. "You want me to take you out?"

He has a hard, handsome face. I like that face. Why is he alone? ... (224)

以上は少し長い引用であるが、主人公のシシーの揺れながらも興味ありげな態度を通して、思春期の少女の心理状況が分かる。シシーとこの見知らぬ男の会話を通して、揺れる思春期の少女の心理状況—これまでの男性からの誘

い、他の女友達との話題と比較、自分の好奇心と体験への願望を垣間見ることができる。主人公が避けようとしつつも、のめり込んでいく男と女の誘惑の会話が巧みに描写される。

会話しつつ歩きながら、次第に男はシシーの腕に触れ、次には肩を掴み寄りかかって来て、遂にはキスをする。男はゆっくりだが、テンポ良く、言葉巧みに話掛けてくる。この動揺と葛藤の中で、シシーは自分の14歳という年齢に触れる。再び私を抱きしめて、彼が唇を首や肩に押し付けてきた時、彼女は窒息しそうに感じた。「僕の車が向こうにあるよ。」と彼が言った時、何か幻惑させるような、冷たいものが体中に恐怖心と共に湧き上がってきた。しかし、動くことも、何か言うこともできなかった。彼は私を掴み離さず、キスをして、盛んに唇を押しつけてきた時、「それを切り取ったら。」と声が出た。彼は私から飛びのいて、ハアハア言いながら私を見つめる時の驚いたような、裏切られたような眼は、私が振り向いて酒場に戻る時の彼について覚えている最後のものだった。このように、次の引用の場面で第3部は終わる。この短編集に収録された他の作品、例えば“Where Are You Going, Where Have You Been?”の類似した場面^[2]に見られるように、オーツの思春期の異性同士の会話、特に、男性が少女を誘惑しようとする時の会話には独特のテンポ、リズム感があり、それが緊迫感を効果的に生みだしている。これは動物が獲物を狙うようなシーンであり、先の引用の前後はオーツの表現力の圧巻とも言える部分である。

... I can't move. Something dazzling and icy rises up in me, an awful fear, but I can't move and I can't say anything. He is touching me with his hands. His mouth is soft but wants too much from me. I think, What is he doing? Do they all do this? Do I have to have it done to me too?

"You cut that out," I tell him.

He steps away. His chest is heaving and his eyes look like a dog's eyes, surprised and betrayed. The last thing I see of him is those eyes, before I turn back and run to the tavern. (226)

この第3部に、彼女の意識の中のもの、記憶にあるものが表出したという形式で、妹、つまり赤ちゃんに対して母が言う忘れられない言葉、場面がある。それは、母親に対する不信として後まで付きまとう。親子関係の描写は、父親は酒好き、自由奔放で、ほとんどシシーの意識、記憶の中では批判されない存在であるが、それに対して母親は女同士愛着が深い分だけ、愛憎も激しい存在である。父親よりは、母と娘は感情をぶつけ合える存在だからである。シシーは母の若い頃の写真を見て、きれいに写っている母を見て、絶対に信じられないと断言する。そうして、その表情からある場面を思い出す。それは、妹のリンダを見て、母が「あなたは一体誰なの。」と言う時の額に小皺を寄せ

るのと同じ表情である。シシーはその母を嫌う。母はリンダに次のように言うのを彼女は聞いてしまう。

“Well, nobody wanted you, kid,” she once said to Linda. Linda was a baby then, one year old. Ma was furious, standing in the kitchen where she was washing the floor, screaming: “Nobody wanted you, it was a goddamn accident! An accident!” That surprised me so I didn’t know what to think, and I didn’t know if I hated Ma or not; but I kept it all a secret... only my girl friends know, and I won’t tell the priest either. Nobody can make me tell. (222)

このように、ストーリーの展開と同時に、第3部と4部には、母と娘関係が緊張感を持って描写されている。ここには、男女関係と「偶然の出来事」、シシーから見た父と母、シシーから見た母親がストーリーの展開と同時に挿話として語られる。第4部では、過去の男への思慕と現在の夫への不信、不安である。

5. 第4部—青春の終焉

第4部はジェスという男と結婚して、ドライブ中にこの同じ居酒屋に立ち寄る場面から始まる。シシーは数年振りのようで、今は妊婦である。

Jesse says, “Let’s stop at this place. I been here a few times before.”

It’s the Lakeside Bar. That big building with the grubby siding, and a big pink neon sign in front, and the cinder driveway that’s so bumpy. Yes, everything the same. But different too—smaller, dirtier.... I haven’t been here for years. (227)

しかし、彼女はこの場所が醜い、秘密めいた、怖いような場所だと感じる。何か彼女には胸を押しつけるような、息苦しいようなものを感じる。彼女は自分の秘密は、皆と同じように可愛いということだったと思っている。夫はそれで自分が好きということだったが、彼はその可愛さの秘密を知らない。彼女は、今はもうこの前の夏、つまり第三部の彼女ではなく、無垢な少女と大人、母と娘という立場、境界線を越えてしまった女性である。立場が逆転していて、彼女は今は成人した大人、母の立場になったところである。

“I know everything, I have no need to learn from anyone else now. I am one of those girls younger girls study closely, to learn from.” (227) とあるような女性になっている。母は私が可愛いと言っていたし、ジェスもそう思って結婚してくれた。自分も今でも、「自分は可愛い。」と思っている。直ぐに、この彼女の可愛いという秘密が露呈する。これは自分の魅力であり、男がついてくるものであることも知っている。

そうして、彼女とジェスは何人かがテーブルに座っているその酒場に入っていく。以前と変わらぬバー、ここに沢山の人間が一時期足しげく通い、通り過ぎていくバー、人生の通過点としての場所が描写される。彼女もここでの今昔を思い出す。

This bar is just like any other bar. Before we were married we went to places like this, Jesse and me and other couples. We had to spend a certain amount of time doing things like that—and going to movies, playing miniature golf, bowling, dancing, swimming—then we got married, now we’re going to have a baby. I think of the baby all the time, because my life will be changed then; everything will be different. Four months from now.

... It was so easy for my mother.... But it will be different with me because my life will be changed by it, and nothing ever changed my mother. You couldn’t change her! Why should I think? Why should I be afraid? My body is filled with love for this baby, and I will never be the same again. (228)

自分は結婚と生まれてくる子供によって、全くこれまでとは違う自分になると言い聞かせている。

ジェスはビールを飲んでいて、気分が良さそうだ。父はジェスを好きになってくれただろうと父のことに思いを馳せるという言葉から父親が工場での事故で死んだことが暗示される。しかし、ジェスは父とは違った人間であってほしいと願う。この第4部の展開は、3部から数年が経過し、シシーの人生に大きな変化があり、彼女は結婚して夫がおり、妊娠していることである。このように、このいつもの酒場で、父の酒場での振る舞いや母の子どもに対する態度などを思い出しつつ、シシーは今までの自分ではない、不安を抱きつつも、もう子供ではないと言い切る。

その時、思わぬことが起きる。バーにいる誰かが振り向いたら、それは以前、数年前に外で会った男のように思われた。私は彼をじっと見たが、彼は自分の腕に抱いた、あのびくびくした女の子の事を覚えてはいなかった。彼は眼を背けた。彼はとても年をとってしまって、痩せていて、疲れたように見える。話をしているその男の友人も同様に疲れて、何かに飽きているように見える。彼は落ち着かない様子で、盛んにあたりを見回している。シシーは自分がキスをしたのは本当にこの男だったのだろうかと思問に思うくらいである。やがて、友人と一緒に帰ろうとするとところを見ると、突然目に涙が浮かんでくる。実は、シシーはこの男を見た時からずっと、胸が高鳴り、しきりに彼に声をかけたい衝動に駆られていた。心の葛藤が続いていた。今の夫ではなく、この男を愛することもできたのだと思っていた。ここには第3部の母のリンダに対する Accident!に通じるものがある。

He has left, he and his friend. He is nothing to me, but suddenly I feel tears in my eyes. What's wrong with me? I hate everything that springs upon me and seems to draw itself down and oppress me in a way I could never explain to anyone.... I am crying because I am pregnant, but not with that man's child. It could have been his child, I could have gone with him to his car; but I did nothing, I ran away, I was afraid, and now I'm sitting here with Jess, who is picking the label off his beer bottle with his fingernails. I did nothing. I was afraid. Now he has left me here and what can I do? (230)

シシーのこの男への思いは、特に思春期の男女の関係は、ちょっとした事がきっかけとなって大きく人生が変わることがある。心配や不安を突き破り、一歩先に踏み出せば大きく人生が変わるということがあるという事を示している。彼女は女友達の中にいた一人の男が今の夫になったことでも一部不安に思っていて、Why did I marry Jess? (229) と述べているように、あの時の状況を受け入れていれば、あの男を愛せたのかも知れないと思う。また、ここには未熟な少女として、青春のあの一コマが真実であったとの証し、あの時の自分を認めて欲しいとの願望があると思われる。ウソではなかった青春のあの一瞬を確かめたいという衝動がある。しかし、それを明かすには、自分が行動をとる必要があるし、夫とのこともある。結果としては、何も行動をとらずに終わる。

I left my hand fall onto my stomach to remind myself that I am in love: with this baby, with Jesse, with everything. I am in love with our house and our life and the future and even this moment—right now—that I am struggling to live through. (231)

今現在のこの状況を受け入れて生きて行くことを覚悟する場面でこの第4部、この“Four Summers”は終わる。

第3部と同様に、この第4部でも「なぜジェスと結婚したのだろう。」と自問する場面が出てくる。通常なら幸せ一杯な若夫婦なのに、主人公シシーは夫との愛に自信が持てないでいる。常に、不安や迷いが付きまとい、心の不安が時々湧き上がる。両親の愛も同じような不安定な形であり、争いが絶えなかった。母との確執もあり、母と自分の関係でも自信がない。

“Pretty Sissie!” my mother likes to say when we visit, though I told her how I hate that name. She is proud of me for being pretty, but thinks I'm too thin.

“You'll fill out nice, after the baby,” she says. Herself, she is fat and veins have begun to darken on her legs; she scuffs around the house in bedroom slippers. Who is my mother? When I think of her I

can't think of anything—do I love her or hate her, or is there nothing there? (228)

このように親子関係、特に母親と娘の関係は不信感がつきまとっている。詰まる所、シシーの親達は幸せな結婚をしていない、幸せな家庭生活を営んでいないことに起因する不信、不安である。これが自分にも影響し、シシーは自分も幸せだろうか、夫ジェスを愛しているのだろうか、愛せられるだろうかという疑問、不信感を生みだしている。

6. 作品の概観と技法—論点の整理と技法

この作品の技法は、表題の示す通り、定点観測的な技法で、同じ場所を同じ人間達が訪れその年代の変化、意識の変化を表現している。それら全てが、主人公シシーの視点を通して描写されるが、それは全て作者オーツの視点である。作品の4部構成は、第1部が幼児期のシシー、第2部が大人たちの世界と異性への目覚め、第3部が思春期とある男との出会い、第4部が思春期の終わりと結婚、その葛藤である。特に、第3部の酒場の外でのある男との出会いから、第4部のその男との再会がテーマである第4部でのジェスとの結婚の内容の描写は付け足しのようなもので、現在の結婚のこととあの男への関心がシシーの心の迷い、葛藤を引き起こす場面でストーリーは終わる。ジェスはその中で迷いつつも決めてしまった、偶然による現実を表しているに過ぎない。この思春期の少女の葛藤は第3部と第4部に共通のものである。

この作品のテーマは、確かに第3部と第4部であるが、それは表面上のことであって、それは第1部と2部があつてのことである。この前半部分で幼児期の主人公が詳細に描写されてこそ、後半部分の展開、つまり思春期の葛藤が生きてくる。第4部の最後の場面で、主人公が嗚咽したくなるような場面まで、ストーリーが進んでいくのを見れば、やはりテーマは、思春期の終わりとその葛藤—男女の関係とその結婚であろう。父と母の愛憎の姿、パブでの大人たちの世界と異性への目覚め、パブの外での自分の男性体験、そしてジェスとの結婚—過去の自分と今の自分との葛藤である。第1部の無意識に遊ぶ幼児期の主人公から第2、3部の思春期、異性への目覚め、第4部の結婚という流れではあるが、この物語では結婚は単に帰結点で、結果に過ぎないように描写されている。夫ジェス自体、それ程詳細には描写されていない。最後に立ち寄った例のパブで、あの男に会って、自分は どうして こうなったのだろうと、あの男は私を どう思っているのだろうと自問している。それほど、自信や確信があつて結婚していない状況を示している。シシーはあの男を選んでいても良かったのかもしれないとさえ思う。しかし、衝動的な男女の出来事の結果であっても、ジェスが私を「かわいい。」とさえ思ってくれれば、このまま行こうという妥協の産物のような運命を受け入れるシシーである。

技法は常に、表現しようとする内容、物語と表裏一体で

あることが自然である。ここでは、同じ場所での4回の夏を通しての主人公の成長・変化と周囲の人間との関係を描写している。この場所の設定自体が一つの技法である。そうして、そこに現れる人間・人生模様とその描写がもう一つの技法である。この状況設定と主人公シシーの物語が渾然一体となっているところがこの作品の特徴であり、語りの技法である。物語の初めからして、何ら説明めいたことはなく、読み進んでいくうちに、この作品の題名を読者は意識し始めることになる。必然的に、読者は最後の第4部、つまり4回目の夏はどうなることかと結末に対する期待感が高まる。しかし、各パート毎に、何らかの関連するテーマがあるわけではない。あくまで、パート毎のシシーの視点からの描写である。この描写は幼児期から思春期を経て、結婚までの範囲であり、長い期間を4回の夏で端的に描写している。最後は、結婚したての若い夫婦のシーンであり、主人公シシーの不安げながらも、現実から逃れられないと観念する場面で終わる。思春期の女の子に加えて、父と母の愛憎関係など全ては、この作品だけでなく、この短編集の作品全体をも網羅するような時間的体系である。この短編集全24作品中にこのような技法、特に長い時間的経過に渡るものはない。

7. 結論

これまで、作品の第1部から4部まで、各部の解釈を中心に物語の展開を提示してきた。また、そのテーマと技法を考察してきた。この短編集に収録された他の作品^[3]とこの作品の違う点は、思春期の少女の心理をテーマとして扱いつつ、その作品構成が時間的に長い年月に渡るということである。通常は、短編という性質上、ある限定的な短い期間における主人公の描写とそこでのテーマが表現されるだろう。その意味では、やや特異な作品ではある。つまり、この作品の第3部と4部だけでも、他の作品にもあるような思春期の男女の出会いと性への誘惑を簡潔に表現するには十分である。しかし、この作品では、敢えて主人公の汚れない幼児期から始まり、性への無知、無意識の憧れ、女としての自覚と性への目覚め、男との出会い、結婚へと、一連の流れを描写しつつ、一人の女性が異性に目覚め、男とどのような出会いで結婚していくのかを4回の夏、その避暑地のシーンに限定して簡潔に表現している。思春期の葛藤は形式上、結婚で終わる。

少女が、信念や確信を抱いてではなく、男との出会い、その瞬間の出来事、ある偶然性（Accident!）でほぼ決まる可能性が高い思春期の迷いや葛藤する少女の境遇を描写している。幼児期から異性にほのかな関心、憧れが芽生える思春期の視点は全て作者の視点であり、これまでの物語とは違い、ほとんど主人公の異性に対する決断の悩みは描写されない。規範とすべき両親から受ける影響により、不安感、自信の無さが描写され、そのまま結婚に繋がり、そこで終わっている。この思春期の少女の心理の探求がオーツの主要テーマであると紹介しつつ、さらに自己の確立

（identity）の問題とへと捉えて分析している論文^[4]もあり、シシーが「自分は誰なのだろう、自分はどこへ行くのだろう」と自問する言葉はそれを示している。このように、この作品は様々な家庭の問題の中での少女成長と思春期の異性との出会いを4つの夏の場面に集約し、その展開を通して思春期の少女と自己確立の問題をオーツの技法で効果的に表現している。

8. 注

- [1] Joyce Carol Oates, *The Wheel of Love* (Vanguard, 1970). 以後、本文中のテキストからの引用は全て括弧にページ数で示す。
- [2] Sissie と”Where Are You Going, Where Have You Been?” の少女 Connie との男女関係の比較考察については Torborg Norman, *Isolation and Contact: A Study of Character Relationships in Joyce Carol Oates's Short Stories 1963-1980* (Acta Universitatis Gothoburgensis, 1984) Chap. Five-3 に詳しい。
- [3] 当拙論はオーツの *The Wheel of Love* 研究の第7番目の論文にあたり、これで全20作品の研究の考察は終了する。オーツに関する拙論は全て旧都立高専、および都立産業技術高専紀要に掲載された。
- [4] 思春期の女性と自己確立の問題については、Rachael McLennan, *Adolescence, America, And Postwar Fiction* (Palgrave Macmillan, 2009) の22-24ページの Introduction と Chap. 2 に詳しい考察がある。